

有田・小田部 56

— 有田遺跡群第250次調査の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1250集

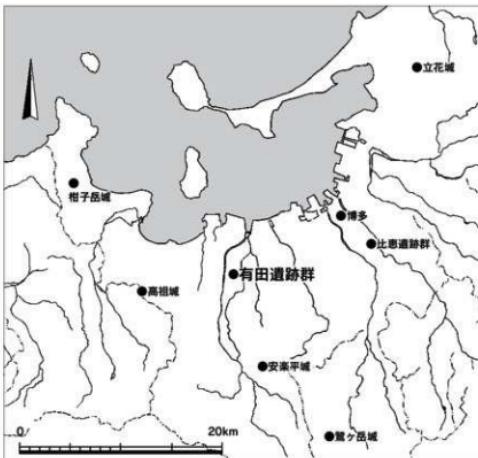
2015

福岡市教育委員会

ARI TA KO TA BE
有田・小田部 56

— 有田遺跡群第250次調査の報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1250集



遺跡略号 ART-250
調査番号 1317

2015

福岡市教育委員会

序

福岡市には北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸と人、物、文化の交流を絶え間なく続けてきた歴史があります。この地の利を活かした人々の生活を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれて明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものが多く、学術研究上においても重要視されているところです。

本調査では日本書紀に記された6世紀代の「那津官家」に関連した施設、その後の奈良時代の役所の建物跡、さらに戦国時代の館跡など重要な遺構が数多く発見されました。

本書はこうした調査成果を収めたもので、多様な開発でやむなく消滅する埋蔵文化財を将来に残していく記録保存の一つです。研究資料とともに、埋蔵文化財に対して理解を深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで、地権者、事業者のをはじめ関係者の方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

平成27年3月25日

福岡市教育委員会
教育長 酒井龍彦

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成25年度に商業店舗建設に伴い、福岡市早良区有田2丁目13番1、13番5で実施した有田遺跡群第250次調査報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は民間受託事業として実施した。
3. 調査は荒牧宏行が担当し、遺構実測図は荒牧の他、辻 節子、三谷 朗子、梅野 真澄、時吉 ひとみ、井上 稔子、深溝 嘉江、前田 英恵、後藤 知佳が作成した。
4. 本書に掲載した遺構、遺物写真は荒牧が撮影した。
5. 本書に掲載した遺物実測図は荒牧、淨書は樋口久美子、荒牧が作製した。
6. 本文は荒牧が執筆した。
7. 本書掲載の実測図、写真、遺物のほか調査で得られた総ての資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管され、活用されていく予定である。

凡　　例

1. 本書に用いた方位・座標は世界測地系による。
2. 掲載した遺物の番号は土器、石器等に分けて通し番号とした。
3. 遺構の種類を示す略号として掘立柱建物跡をS B、堅穴住居跡をS C、土壙をS K、溝をS D、棚列をS A、柱穴をS P、性格不明のものをS Xとした。
4. 報文中の輸入陶磁器の説明には「太宰府条坊跡X V」太宰府市の文化財 第49集 2000 太宰府市教育委員会、山本信夫・山村信榮「中世食器の地域性〔10〕九州・南西諸島」国立歴史民俗博物館研究報告第71集 1997 の編年・分類を用いた。

調査基本情報一覧

遺跡名	有田遺跡群	調査次数	250次	遺跡略号	ART-250
調査番号	1317	分布地図図幅名	082 原	遺跡登録番号	0309
申請面積	975m ²	調査対象面積	605m ²	調査面積	811m ²
調査期間	平成25（2013）年7月16日～10月3日			事前審査番号	24-2-460
調査地	福岡市早良区有田2丁目13番1、13番5				

本文目次

I	はじめ	1
1.	調査に至る経過	1
2.	調査の組織	1
II	調査の経過	1
1.	調査範囲と方法について	1
2.	調査の経過	1
1.	地形	2
2.	既往の調査成果と歴史的背景	2
IV	調査の記録	4
1.	基本層序	4
2.	概要	4
3.	弥生時代から古墳初頭の遺構と遺物	4
(1)	貯蔵穴 (SX)	4
(2)	竪穴住居跡 (SC)	6
(3)	掘立柱建物 (SB) , 構造 (SA)	7
(4)	柱穴出土遺物 (SP)	7
4.	古墳後期から古代の遺構と遺物	10
(1)	構造 (SA)	10
(2)	掘立柱建物跡 (SB) , 土壙 (SK)	10
5.	中世の遺構と遺物	13
(1)	溝 (SD)	13
(2)	土壙 (SK)	14
(3)	掘立柱建物跡 (SB)	14
(4)	柱穴出土遺物 (SP)	22
V	まとめ	26
1.	弥生前期の環濠集落について	26
2.	「那津官家」関連施設について	27
3.	7~8世紀の官衙遺構について	27
4.	中世末の屋敷跡について	30

挿 図 目 次

第1図 早良平野の遺跡位置図 (1/100,000)	2	第17図 SB05実測図 (1/80)	17
第2図 有田遺跡群の既往調査位置図 (1/10,000)	3	第18図 SB06実測図 (1/80)	18上
第3図 有田遺跡群第250次調査位置図 (1/400)	4	第19図 SB07実測図 (1/80)	18下
第4図 有田遺跡群第250次調査遺構全体図 (1/100)折り込み		第20図 SB08実測図 (1/80)	19上
第5図 弥生～古墳時代の遺構図 (1/80)	5	第21図 SB09実測図 (1/80)	19下
第6図 弥生～古墳時代の出土遺物実測図 (1/2, 1/3)	6	第22図 SB10実測図 (1/80)	20上
第7図 SA01平面実測図 (1/80)	7	第23図 SB11実測図 (1/80)	20下
第8図 SB1006, 1007, 1008実測図 (1/80)	8	第24図 SB12実測図 (1/80)	21
第9図 SB1006, 1007, 1008柱穴土層断面図 (1/40)	9	第25図 SB13実測図 (1/80)	22
第10図 SK02実測図 (1/40)	10	第26図 SB14～17実測図 (1/80)	23
第11図 SK02出土遺物実測図 (1/3)	11	第27図 SB18～20実測図 (1/80)	24
第12図 中・近世の溝実測図 (1/40)	12上	第28図 SB21実測図 (1/80)	25
第13図 中・近世の溝出土遺物実測図 (1/3)	12下	第29図 中世柱穴出土遺物実測図 (1/3)	26
第14図 中世土壤実測図 (1/40)	13	第30図 「那津官家」関連の区画施設 (1/1,000)	28上
第15図 SB01実測図 (1/80)	15	第31図 郡衙施設分布図 (1/2,000)	28下
第16図 SB02～04実測図 (1/80)	16	第32図 中世末環濠分布図 (1/1,000)	29
		第33図 弥生前中期環濠位置図 (1/8,000)	30上
		第34図 中世末期環濠位置図 (1/8,000)	30下

表 目 次

第1表 中世の復元掘立柱建物寸法一覧	27
--------------------------	----

図 版 目 次

図版1 調査区東半 (西から)	
図版2 調査区中央～西側	
図版3 調査区西際	

I はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は同市の早良区有田2丁目13番1、13番5における店舗建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成24年8月16日付で受理した。これを受けて文化財部埋蔵文化財審査課事前審査係は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である有田遺跡群に含まれ、3回の試掘調査によって現地表面下3~40cmで遺構が確認されたことから遺構の保全等に関して申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できることから削平される駐車場および店舗部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意し、平成25年6月14日付で個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託を締結した。続いてこの契約に従い発掘調査を同年7月16日から10月3日まで実施し、翌平成26年度に資料整理および報告書作成を行うことになった。

2. 調査の組織

25年度の発掘調査、および26年度の資料整理を以下の組織体制を行った。

【調査主体】 福岡市教育委員会

【調査総括】 経済観光文化局 文化財部埋蔵文化財調査課 課長 宮井善朗（25年度）

常松幹雄（26年度） 同課調査第2係長 榎本義嗣（25年度、26年度）

【庶務】 埋蔵文化財審査課 管理係長 和田安之（25年度） 内山光司（26年度） 管理係
川村啓子（25年度、26年度）

【事前審査】 埋蔵文化財審査課 事前審査係長 加藤良彦（25年度） 佐藤一郎（26年度） 同課
事前審査係 主任文化財主事 佐藤一郎（25年度） 池田祐司（26年度） 同課事前
審査係文化財主事 比嘉えりか

【調査担当】 埋蔵文化財調査課 主任文化財主事 荒牧宏行

II 調査の経過

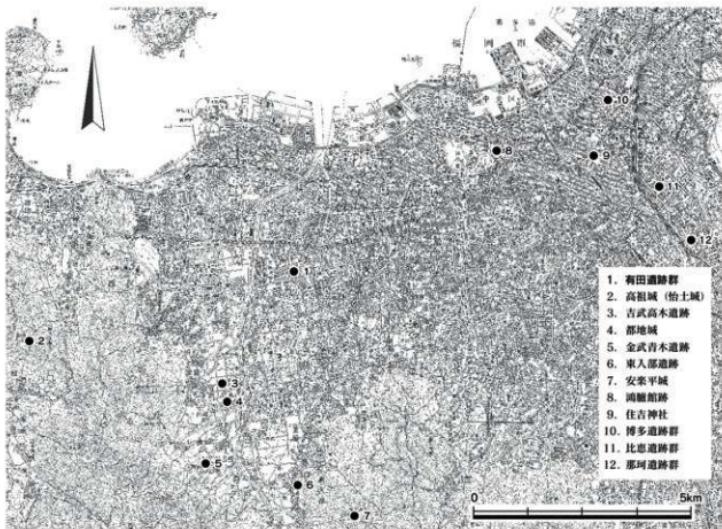
1. 調査範囲と方法について

3回の手掘りによる試掘の判断と異なり、遺構の密度は濃く、また削平され、消滅しているとみられていた6世紀代の「那津官家」の関連施設と考えられる3本柱列や古代の官衙建物跡など重要な遺構も遺存していた。従って、調査期間、費用等は極めてひっ迫することになった。この為、調査方法を変更し、遺構が消滅する可能性が高い範囲のみ完掘していく、削平が浅い範囲については検出のみか、削平される深さに合わせて発掘を行った。

第3図は発掘の状況を示したものである。東側のAの範囲は建物部分と駐車場造成による削平が深い範囲で完掘した部分である。しかし、貯蔵穴4基の下部は未掘である。Bについては遺構面が極めて浅い北西部や大型の官衙建物の柱穴などはほぼ完掘したが、大半が遺構検出のみである。Cは建設による削平がほとんど無く、未調査部分である。

2. 調査の経過

排土置き場の確保から東西に分割し、東半分を先行して発掘した。



第1図 早良平野の遺跡位置図 (1/100,000)

III 位置と環境

1. 地形

有田遺跡群は早良平野のほぼ中央部に位置した洪積台地に立地している。調査区はこの南限北約1,700m延びた洪積台地の南寄りの最高所に位置する。調査区の標高はGL13.3m、検出面は13.0～13.2mである。

2. 既往の調査成果と歴史的背景

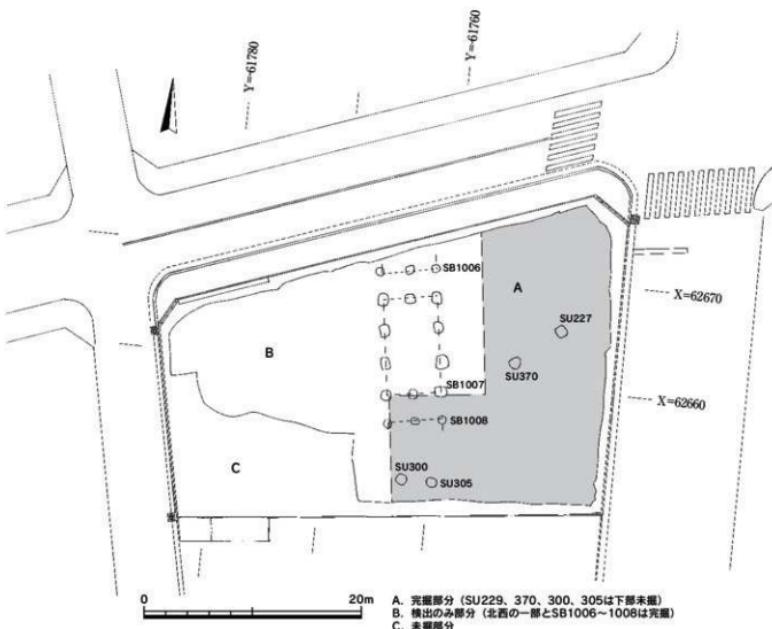
ここでは本調査で検出された遺構の主な時期である弥生前期、古墳後期に比定される6世紀後半、古代末から奈良時代の7～8世紀、戦国期末の16世紀前後について概略を記す。

第33図に示すように本調査地点周辺は台地の最高所を占めていることから弥生前期の環濠集落が築かれ、中心的な集落施設が配置されている。6世紀代になると、「日本書紀」に宣化元(536)年に築かれたという「那津官家」の関連施設と考えられる3本柱列による外郭施設や大型の総柱倉庫群が検出されている。同様の遺構は東側の博多湾に面した福岡平野の比恵遺跡群でも検出されている。



第2図 有田遺跡群の既往調査位置図 (1/10,000)

その後の飛鳥、奈良時代においても拠点に設置された官衙の性格は継承され有田遺跡群では早良郡衙の郡庁や正倉などがこれまでの調査で検出されている。戦国期の天文二十(1551)年、大内氏の滅亡後は早良平野は博多とともに大友氏支配となる。志摩の政所と博多や筑前支配の拠点である立花城を結ぶ位置として早良郡代の小田部氏の本拠地である有田遺跡群は重要視される。しかし、天正六(1578)年耳川の合戦で大友氏が島津氏に敗れると肥前の龍造寺氏は島津氏方となり小田部氏を攻め、天正七(1579)年、本城の安楽平城を落城し小田部氏を討ちとった。この折、本拠地であり、家臣団の屋敷地でもあった有田遺跡群は戦火を被ったとみられる。



第3図 有田遺跡群第250次調査位置図(1/400)

IV 調査の記録

1. 基本層序

調査区の北西部ではG.L.のほぼ直下で検出面の鳥栖ロームとなり、その標高は13.2mとなる。南側のSD167より北側では20~30cmの耕作土下の標高13.2~13.1mの検出面となり、以南では約10cmがさらに削平され標高13.0mが検出面となる。遺構の遺存状況から奈良時代までの遺構は60cm以上は削平され、屋敷地を築いた戦国期末と畠地となつた近世以後に大きく造成されたとみられる。

2. 概要

検出された主な遺構は弥生前期の貯蔵穴、弥生後期から古墳初頭の堅穴住居跡、古墳後期、奈良時代の「那津官家」関連の施設、官衙建物跡、16世紀の戦国時代の屋敷跡である。以下、時代順に1. 弥生時代から古墳初頭の遺構、2. 古墳後期から奈良時代の遺構、3. 中世の遺構の項目で説明を記す。

3. 弥生時代から古墳初頭の遺構と遺物

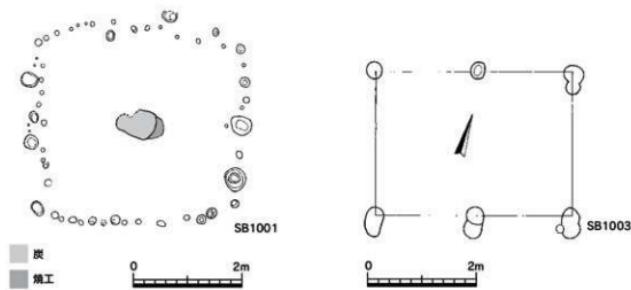
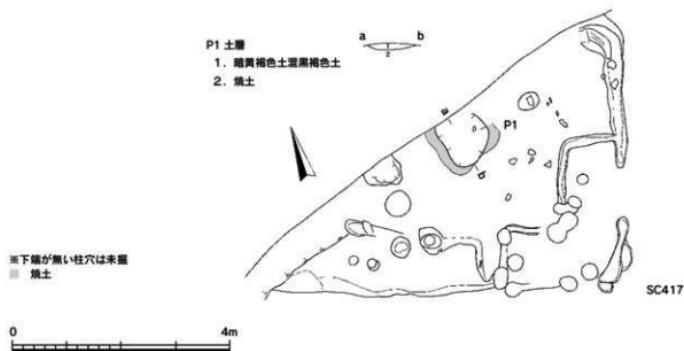
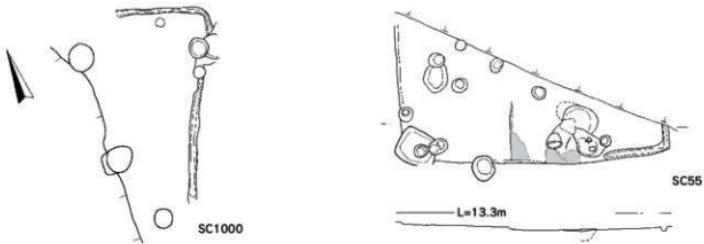
弥生前期の貯蔵穴3基と弥生後期から古墳初頭の堅穴住居跡3軒が検出された。本調査地点は第33図で示したように弥生前期(夜臼~板付I式期)の環濠内に位置する。

(1) 貯蔵穴(SU)

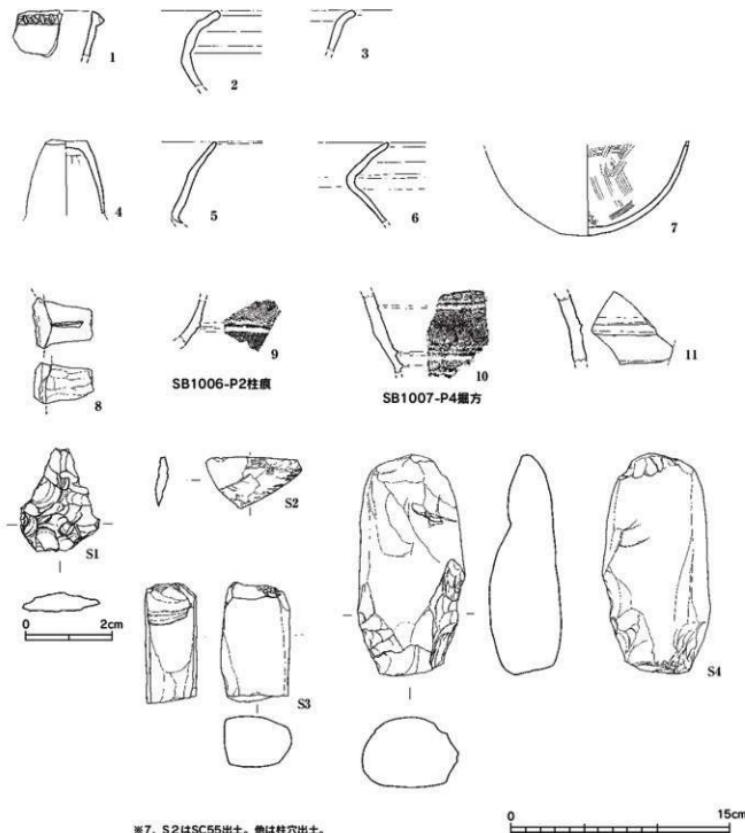
調査区の南側で近接して2基(SU300, 305)東側でSU227, 370が検出された。いずれも検出のみにとどまり完掘していない。



第4図 有田遺跡群第250次調査遺構全体図 (1/100)



第5図 弥生～古墳時代の遺構図 (1/80)



第6図 弥生～古墳時代の出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

(2) 積穴住居跡 (SC 第5図)

SC55

調査区北東際で検出された。北側の大半が調査区外となる。主軸方位をN-48°-Eにとる。東辺長490cm、壁高2cm程度である。北東壁際の一部には幅16cm、深さ9cmの堀溝が検出された。

西側に削平されたベッドが検出され、比高差がほとんどない直線的な落ちに焼土がそのラインに沿って分布していた。また、焼土は東辺中央部にも分布し、下部から不整形のピットが検出された。

出土遺物（第6図の7）はSP01から出土した古墳初頭の壺底部である。外面に径3.5cm程度の丸みのある底部がナデ押さえで成形されている。ハケメは内面のみに残る。S2もSP01から出土した安山岩製の石包丁である。遺存部に穿孔は無く、片面の上刃を斜めに研磨して削ぎ落とす。

SC417

調査区北際の中央で検出された。東辺長はSC55とほぼ同じ約490cmを測る。東辺際の壁溝上に焼土が分布していた。また、南東隅に長方形状に小溝が巡り、ベッドの可能性がある。P1は径110cmの正な円形プランを呈した中央炉である。主柱穴はP2、P3ないしP4と考えられるが、いずれも未掘である。

SC1000

調査区の北西際で検出された。削平され、壁溝の一部のみ検出された。規模等は不明である。

（3）据立柱建物、柵列（SB 第4、5図）

SB1001（第5図）

調査区の東寄り中央部で検出された。径6～10cm前後の杭穴が連続した軸長370cm前後の正方形に近いプランである。中央に炭、焼土が分布していた。壁立ちの建物もしくは堅穴住居跡が削平されたものが考えられる。

SB1002（第4図）

SB1002の北西部で近接して検出された。小穴が連続し、SB1002と類似するが、東側はSD04に切られ不明である。

SB1003（第5図）

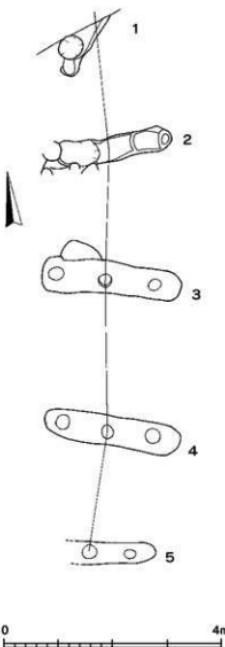
調査区西寄りの中央部で検出された。主軸方位をN-74°Eにとる1×2間の東西棟である。梁行260cm、桁行364cmを測る。その桁行の柱間は176cm、188cmである。南側の柱穴は2つの柱穴が重複し、建て替えによる切り合いもしくは抜き取りが考えられるが、未掘であるので不明である。

SA1004（第5図）

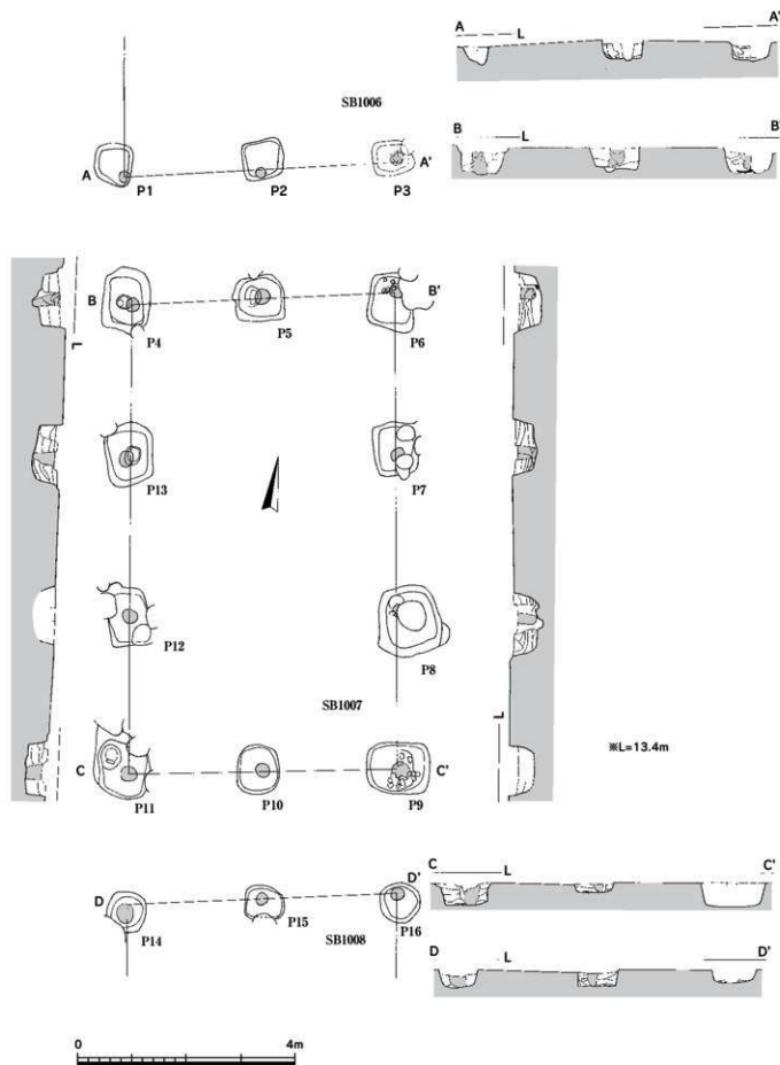
延長方向をN-14°30'Eにとる柵列である。方向や黒褐色の埋土から中世ではなく堅穴住居跡と近い時期と考えられる。SC417の東辺に沿って延長し、SB1001付近で終わる柱間は154～164cm内である。柱穴の径は30cm前後であるが、深さ等は未掘のため不明である。

（4）柱穴出土遺物（SK 第6図）

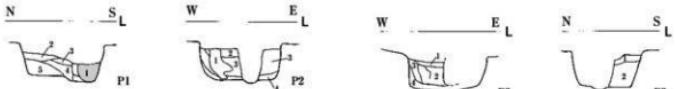
1は突帯文甕の口縁部である。2は壺口縁部は頸部に段を有す。3は甕の如意口縁である。4は土師器の高坏脚部である。エンタシス状に膨らみをもつ。6は壺口縁部である。



第7図 SA1005平面実測図 (1/80)



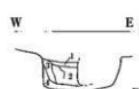
第8図 SB1006, 1007, 1008実測図 (1/80)



1. 黄褐色粘土質土(粘土)
2. 黄褐色粘土
3. 黄褐色粘土質土



1. 本層
2. 黄褐色粘土質土
3. 黄褐色粘土質土



1. 黄褐色土
2. 黄褐色土黑褐色土
3. 黑褐色土



1. 黄褐色土黑褐色土
2. 黄褐色土黑褐色土



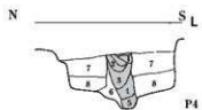
1. 黄褐色土—黄褐色土
(粘土と砂質土の交り)
2. 黄褐色土混生黑色土(柱状)
3. 黑褐色土
4. ローム混生黑色土(柱状)
5. ローム混生黑色土
6. 黄褐色粘土質土
7. 黄褐色粘土質土



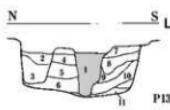
1. ローム混生黑色土(柱状)
2. ローム混生黑色土
3. 黄褐色粘土質土(くられいたけいじ)



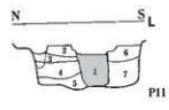
1. 黄褐色土(柱状)
2. 黄褐色土混生黑色土
3. 黑褐色土



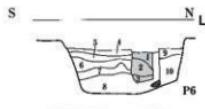
- 1~4. ローム混生黑色土(柱状)
5. ローム混生黑色土
6. 黄褐色土
7. ローム混生黑色土



1. ローム混生黑色土(柱状)
2. ローム混生黑色土(中性柱穴)
3~11. ローム混生黑色土



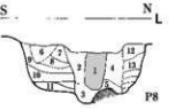
1. 黄褐色土(柱状)
2~7. 黄褐色土



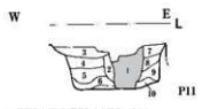
- 1~3. ローム混生黑色土(柱状)
4. 黄褐色土
5. ローム混生黑色土
6. 黄褐色土
7. ローム混生黑色土
8. 黄褐色土



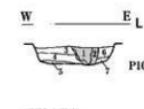
- 1~4. ローム混生黑色土(柱状)
5~10. ローム混生黑色土



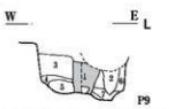
1. ローム混生黑色土(中性柱穴)
2~5. ローム混生黑色土
6~13. ローム混生黑色土



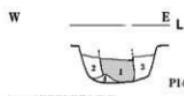
1. 黄褐色土(柱状)
2. 黄褐色土
3~10. ローム混生黑色土



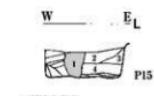
1. 黄褐色土(柱状)
2. 黄褐色土
3~7. ローム混生黑色土



1. 黄褐色粘土質土(柱状)
2. 黄褐色粘土質土
3~6. ローム混生黑色土



1. 黄褐色土(柱状)
2. ローム混生黑色土
3~6. 黄褐色土

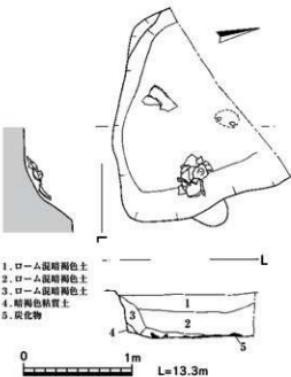


1. 黄褐色土(柱状)
2~3. ローム混生黑色土



L=13.4m
2m

第9図 SB1006, 1007, 1008柱穴土層断面図 (1/40)



第10図 SK02実測図(1/40)

前後の布掘りに3本の柱痕が検出された。巻末の第30図で示すように107次、230次、78次で検出された欄列(屏)の延長と考えられる。布掘は5列が検出され、布掘1は大きく斜行し、コーナーに位置しているものと考えられる。その南側に配置された布掘2、3、4の柱筋は通るが、布掘5の柱筋は西側にずれている。柱痕の間隔は76～90cmを測り3尺程度の柱間とみられる。柱痕は径20～27cmを測るが、切り合いが著しい。布掘1、2以外は検出に止めている為、深さなどは不明である。

(2) 挖立柱建物跡、土壤

SB1006・1007・1008(第8、9図)

調査区の中央で検出された。梁間2間の南北棟が3棟以上縱列しているとみられる。SB1006の北側延長は調査区外となり、SB1008の南側は削平され消滅している。主軸方位はN.8°Wである。

各建物の桁行柱筋が通り連結された長舎と考えられる。SB1006の梁行は500cm、SB1007は486cm、496cm、SB1008は496cmを測る、いずれもSB1007の桁行に対してわずかに斜行している。柱間は242～245cmの8尺とみられる。SB1007の桁行はP4～P11間が862cm、P6～P9間が882cmを測り、柱間は285cm～307cmまでの幅がある。SB1006～1007、SB1007～1008の各建物間の柱間は227cm～244cmの幅があり、8尺の間隔がおかれている。

検出された柱穴掘方は1辺が80～120cmの方形プランを呈し、内部に径20～26cmの柱痕が検出された。深さは20～50cmの遺存で、南側のSB1008では検出面が削平され、柱穴の残りが浅くなっている。SB1007のP6とP9には柱痕の周囲に根固めとみられる小疎が散在的であるが詰められていた。

柱穴から第6図の須恵器9、10が出土したが、製作時期を遡る遺物とみられる。

SK02(第10図)

調査区の北東隅で検出された。北側が調査区外となり大半が不明である。最下に炭が検出され、壁際に甕15、16が落下した状態で出土した。

8は渡来系の甕取手である。直線的に延び、上面にスリットを有す。9～11は須恵器の器台である。9は壊部か。外面に波状文を有す。10は中世の柱穴から出土した。外面に波状文を施す。11は透かしを有す。

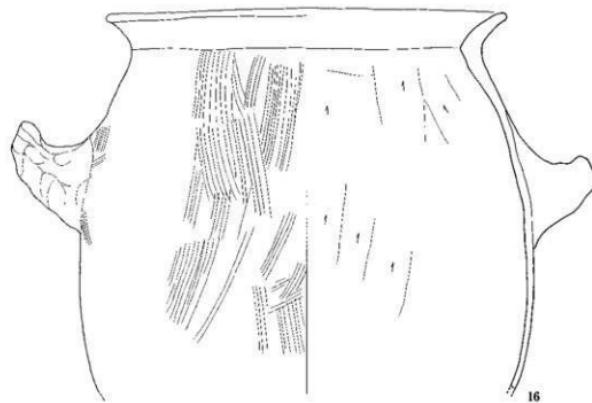
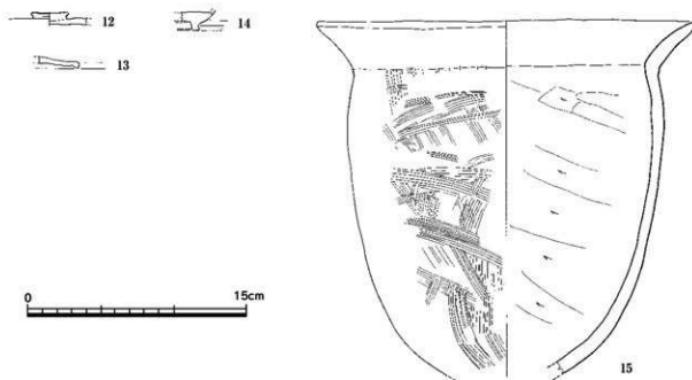
石器 S1は黒曜石製の石鎚未成品とみられる。先端を欠損している。S3は抉入片刃石斧の未成品とみられる。上部に打撃痕、側面の1箇所が研磨されているほかは自然面を残す。堆積岩製。S4は安山岩製の磨製石斧未成品である。1箇所わずかに研磨がみられる。

2. 古墳後期から古代の遺構と遺物

(1) 欄列

SA1005

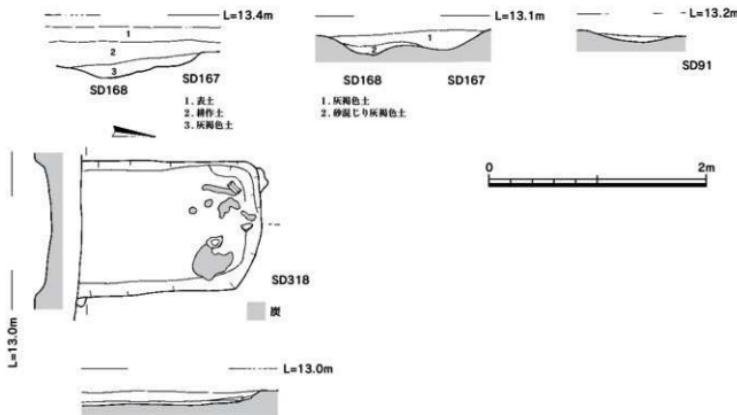
調査区の西際で検出された。長さ250cm、幅50cm



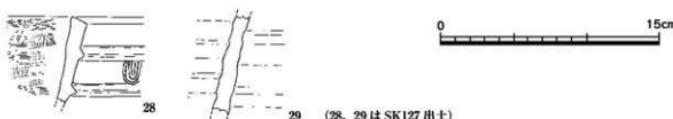
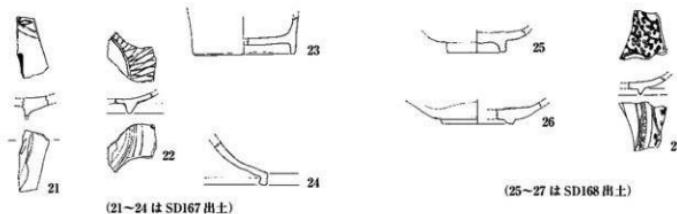
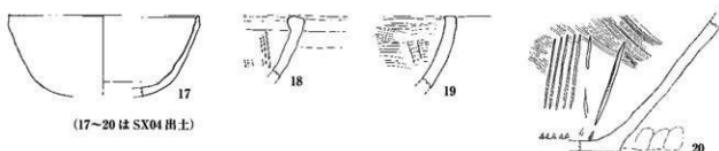
第11図 SK02出土遺物実測図 (1/3)

深さは40cmを測り、埋土には地山の黄色ロームを含んだ土が水平に近く堆積し、埋め戻された可能性がある。

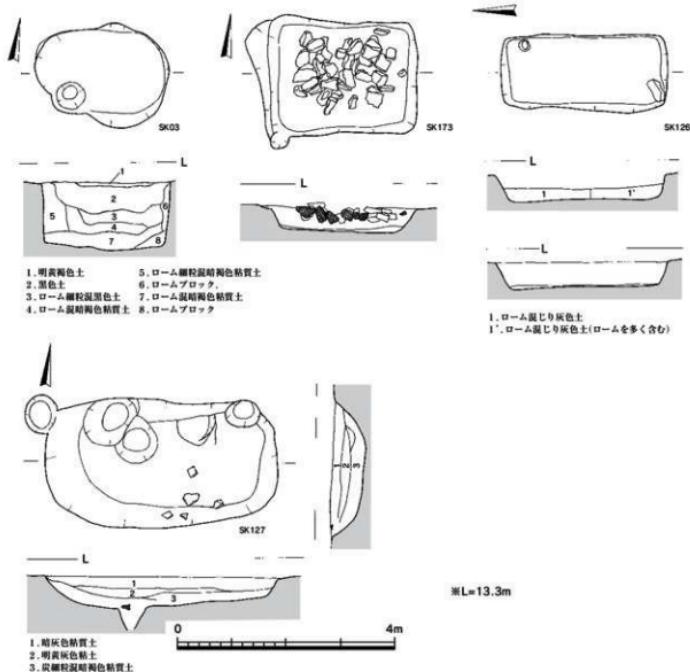
出土遺物 12～14は須恵器坏である。12の宝珠攝みの中央はわずかに高まりがある。13は坏蓋端部、14は坏身高台である。15、16は土師器甕である。



第12図 中・近世の溝実測図 (1/40)



第13図 中・近世出土遺物実測図 (1/3)



第14図 中世土壤実測図 (1/40)

5. 中世の遺構と遺物

遺構が最も多く検出された時期である。特に東側に密度濃く分布していた。埋土が灰褐色を呈し、他の時期との区別が比較的容易である。

(1) 溝 (SD 第12図)

SD91 (SD169)

調査区の東際で検出された。ほぼ真北の方向で直線的に延長する。南北端の遺構面が下がり、削平されて消滅している。最も遺存が良好な中央部で幅160cm、深さ18cmを測る。壁の立ち上がりの角度は緩やかで浅皿状の断面形を呈す。

SD167, 168

調査区南際で検出された。東西方向に延長していくが、南北方向のSD172, 173と合流した以西では北側に振れている。SD167と平行して北側約1.1m付近に烟の畠とみられる細い溝が検出された。これより南側にかけて遺構面の地山が削平され、比高差40cmの段落ちがみられる。

SD167とSD168は接して平行し、切り合ひ関係は不明である。埋土には灰褐色土が堆積し、SD168の最下には砂屑が薄くみられた。SD167、168は幅84cm、深さ20cm程度である。SD167には溝内と、わずかに上端の外側に出た範囲に径5cm前後の杭がランダムに打ち込まれていた。

出土遺物 21～24はSD167出土である。21～23は丸付、24は青磁で、脚部とみられる。図示した全面に施釉され、外面に釉溜りが生じている。25～27はSD168出土である。25は陶器碗である。内面は褐色の釉に螺旋状に灰白色の条線が施され、外面は疊付が露胎で褐色を呈し、他は劣化し、緑灰褐色を呈す。26は青磁碗である。釉色は灰色に発し、外底部は拭き取られ、褐色を呈す。内面見込みに砂目が付く。

SD318

調査区南東隅で検出され、調査区外に延長していく。土壤もしくは溝と考えられる。下底近くに炭が分布する。

SK04

調査区北側中央部で検出された。長軸長620cmの湾曲した不整形の梢円形プランを呈す。入り組んだ下端の形状で最も深い部分で検出面から23cm前後を測る。

出土遺物17は白磁碗である。図示した範囲は全面施釉されている。18は軟質の瓦質押鉢である。19、20は同一個体の土師質押鉢である。黄白色を呈し、硬質である。内面に細かいハケメが施され、6本単位の摺目を有す。程度の柱間とみられる。柱痕は径20～27cmを測るが、切り合ひが著しい。布振り1、2以外は検出に止めている為、深さなどは不明である。

(2) 土壌 (SK 第13、14図)

SK03

調査区の北東隅で検出された。長軸長122cm、短軸長92cmの歪な梢円形プランを呈す。埋土は上層に黒色土、下層にロームを黄褐色ロームを多く含む粘質土が堆積していた。その層序はレンズ状に近い。壁は直に近く掘りこまれている。

SK126

調査区の東寄りの中央部で検出された。主軸をN3°-Wの方向にとる。長軸長153cm、短軸長68cmを測る。埋土は黄褐色ローム混じり灰色土であった。

SK127

調査区東寄りの中央部で検出された。主軸方向をE-85°-Nにとる。長軸長212cm、短軸長118cmを測る。深さ29cmを測る。西辺の下端は緩やかで、下底には切り合った柱穴が検出された。埋土は上層に黄灰色のロームを含む灰色粘質土、下部に炭の細粒を含む暗灰色の粘土層が堆積したレンズ状の層序である。

出土遺物 28は瓦質の鉢である。外面にスタンプ文を有す。29は備前焼片である。

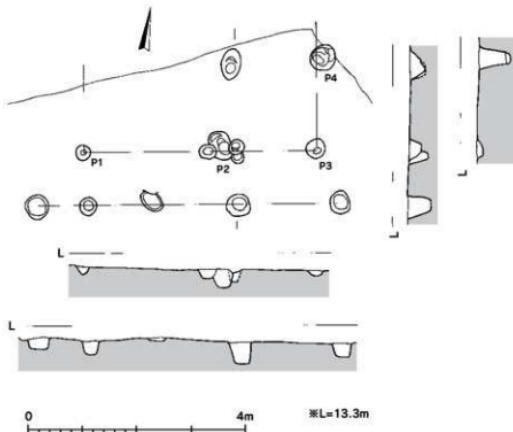
SK173

調査区の南東隅で検出された。長軸長135cm、短軸長100cmを測る方形プランを呈す。深さは25cmを測る。下底に20cm大の礫が少し重なり敷かれていた。礫は花崗岩が多く砾岩、砂岩、玄武岩を含む。中央部分が特に火熱を受けている。

(3) 据立柱建物跡 (SB 第15図～第29図)

SB01

調査区の北東部で検出された。大半が北側の調査区外となるが、梁間2間に庇が付く据立柱建物とみられる。梁間は428cmを測り、14尺とみられるが、P2は中心から東にずれている。身舎の桁行P3、P4間は120cm（4尺）を測る。



第15図 SB01実測図 (1/80)

SB02, 03, 04

調査区の北東部に位置する南北棟である。梁行2間、桁行4間の建て替えた掘立柱建物跡とみられる。柱穴を近接して掘りおしているが、西側桁行の柱筋はほぼ変わらない。北側の梁行はSB02が456cm、SB03が500cm、SB04が530cmを測る。西側の桁行は770cmないし790cmを測る。P1、P3には根石が据えられ、P2の埋土には焼土が含まれていた。

SB05

調査区の北東部で検出された。SB02～05と切り合う 2×4 間の南北棟である。梁行584cm、桁行766cmを測る。柱筋は通り、柱穴の位置も対置している。P1は土壤を切る。

SB06

調査区の北東部で検出された。SB02～05と切り合う 3×3 間の南北棟である。梁行522cm、桁行676cmを測る。南側の桁行1間分を仕切る柱列が検出された。

SB07

調査区の北東部で検出された。SB02～05と切り合う 2×3 間の南北棟である。径25cm前後の小さい柱穴となる。梁行366cm、桁行566cmを測る。柱間は梁行、桁行ともに190cm前後である。

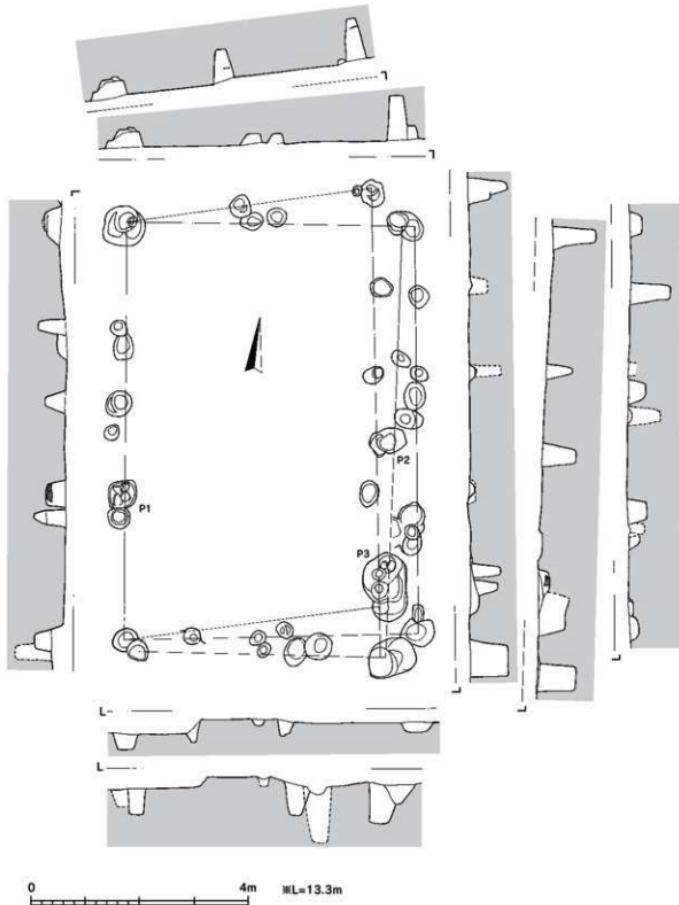
SB08

11の柱穴に根石が据えられている。根石が火熱を受け赤変し、埋土に焼土塊を含むものが多い。北側の桁行1間分の間仕切りの柱列が検出された。柱間は梁行、桁行ともに190cm前後が多い。

SB09

調査区の東際中央で検出された。SB08と切り合う 2×2 間もしくは 2×3 間の東西棟である。また、SB10と桁行の柱筋がほぼ同じことからこれと一体となった 2×4 間の東西棟の可能性もある。

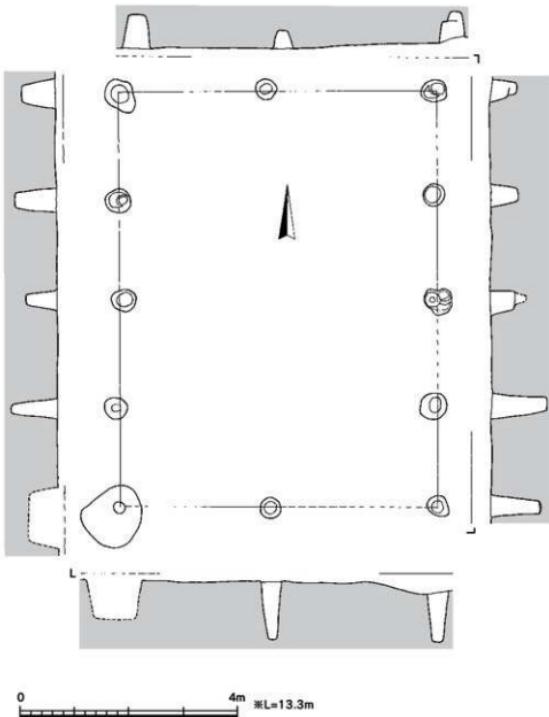
梁行372cm、桁行556cmを測るが、SB10と一体である場合は桁行724cmとなる。梁行の柱間は



第16図 SB02~04実測図 (1/80)

190cm前後、桁行では2間の場合は240~310cmまでばらつきがみられ、3間の場合は190cm前後となる。
SB10

調査区の東際中央で検出された。SB09と桁行の柱筋がほぼ同じで、同じ規模の掘立柱建物が東側に



第17図 SB05実測図 (1/80)

移動して建て替えられた建物もしくは、SB09と一緒にいた桁行4間の掘立柱建物と考えられる。内部に束柱の可能性がある柱穴が検出された。

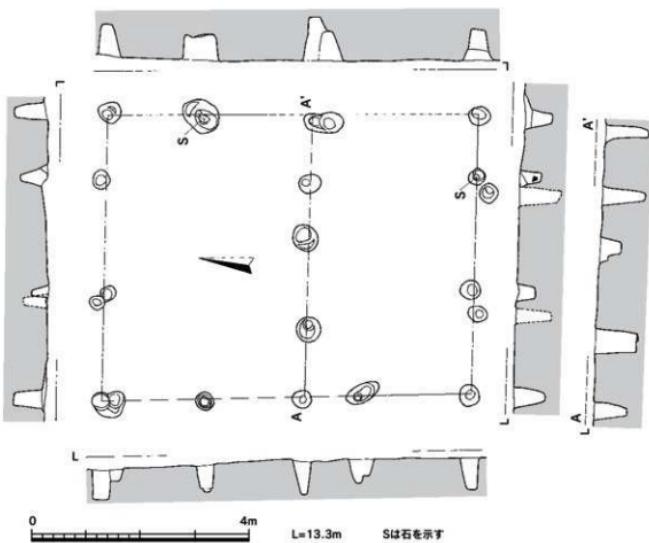
SB11

調査区の南東隅で検出された。南北棟とみられ、梁行き2間。桁行は南側の調査区外となるため、不明である。北側に間仕切りとなる柱穴が検出された。削平されているため、すべての柱穴が小さくなっている。

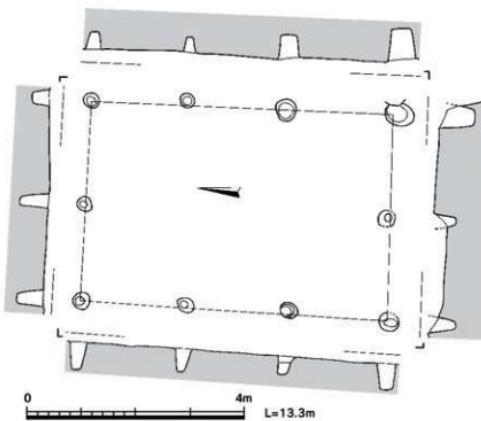
SB12

調査区中央部で検出された。4面に庇を付設した2×3間の東西棟である。梁行496cm、桁行884cmを測り、桁行の規模は検出された掘立柱建物のなかで最も大きい。

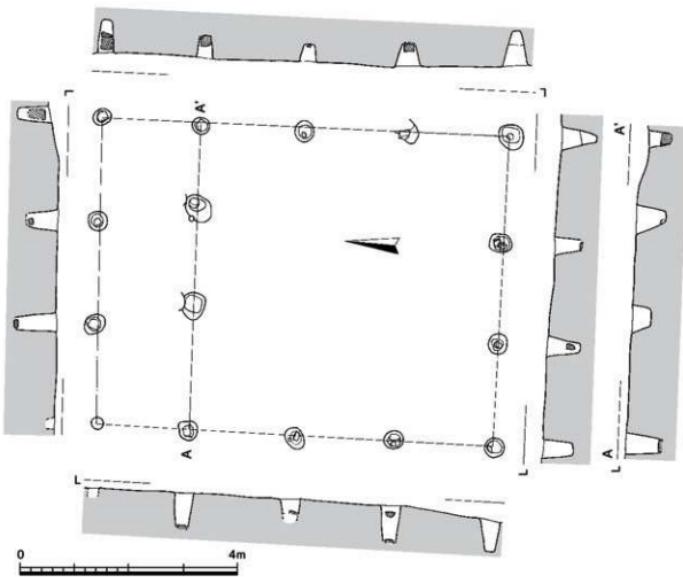
庇は東、南面では側柱から180cm前後の間隔をおいて柱列が検出され、北面と西面では狭まり、130cm前後の位置となる。北西隅の柱穴は検出されず、入り口と関連している可能性がある。



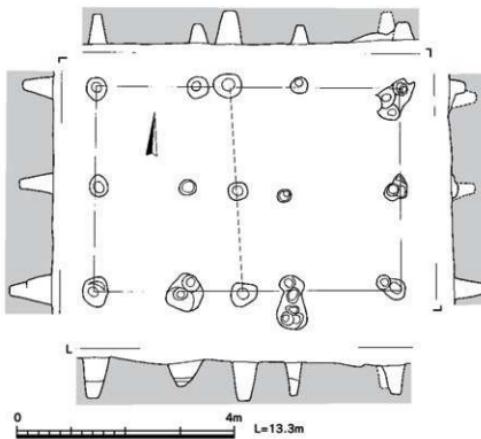
第18図 SB06実測図 (1/80)



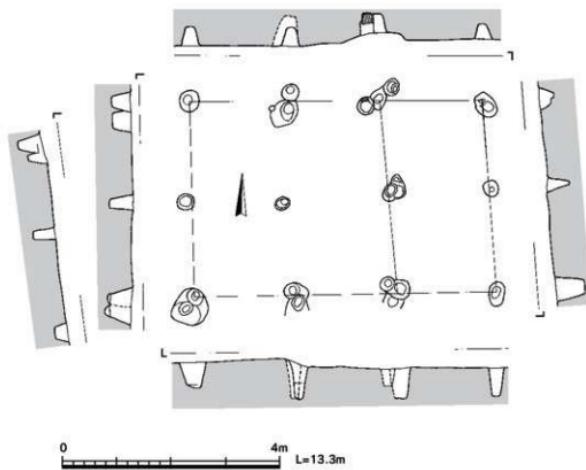
第19図 SB07実測図 (1/80)



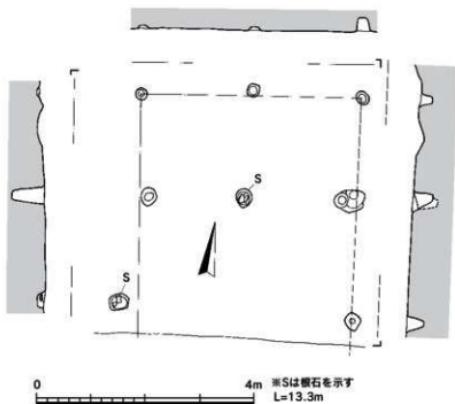
第20図 SB08実測図 (1/80)



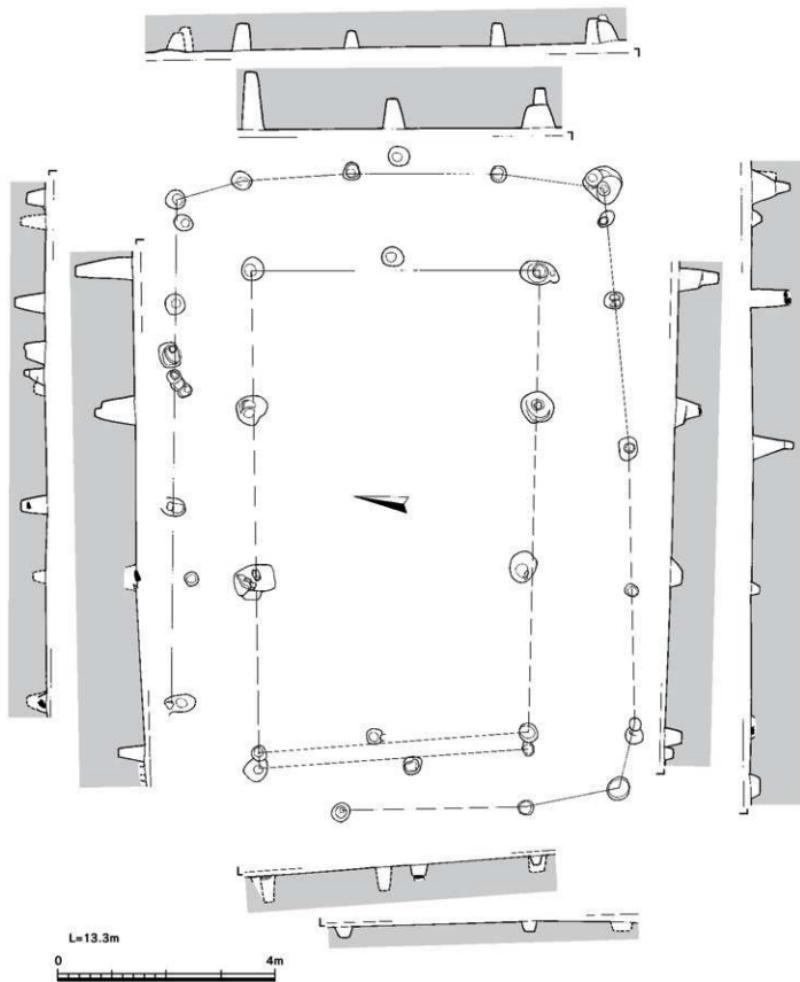
第21図 SB09実測図 (1/80)



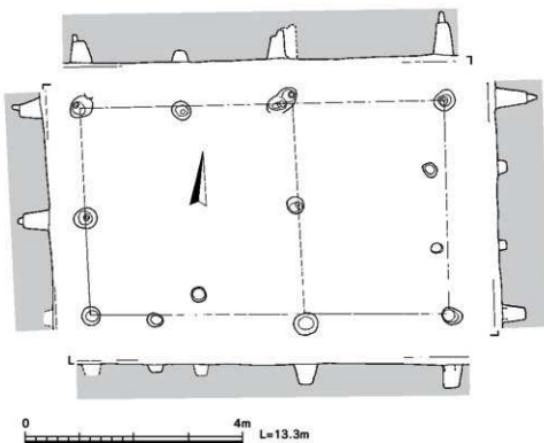
第22図 SB10実測図 (1/80)



第23図 SB11実測図 (1/80)



第24図 SB12実測図 (1/80)



第25図 SB13実測図 (1/80)

SB13

調査区の中央部で検出された。西側梁行2間であるのに対し、東側では小柱穴の間柱を2設けた3間となり、桁行は柱間にばらつきがある3間となっている。梁行384cm、桁行670cmを測る。

SB14~17

調査区中央南界で検出された。北辺と西辺の柱筋が2重になり建て替えが考えられる。復元として北辺の外側と西辺内側の3×4間の南北棟をSB14、北辺内側、西辺外側の3×3間の東西棟をSB15、SB15の北辺に接した柱列のSB16、北辺外側、西辺外側の4×4間の方形プランになるSB17が考えられる。

SB18~20

調査区の南際中央部で検出された。2×3間の南北棟が2棟並列した建物(SB18、SB19)もしくは3×4間の大型の東西棟(SB20)とみられる。

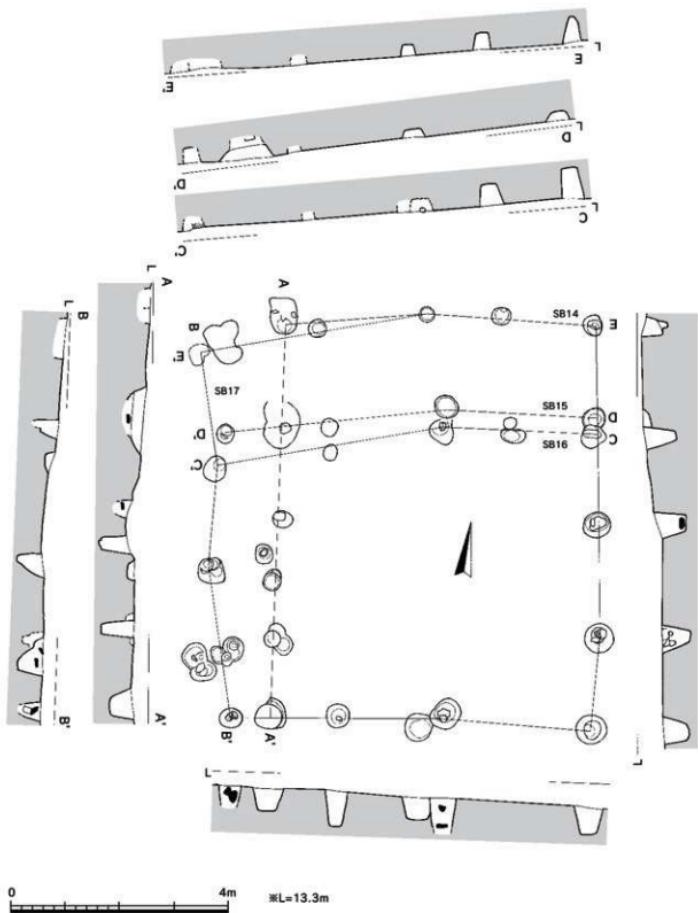
並列した南北棟の西側建物SB15は2×3間とみられ、梁行374cm、桁行726cmを測る。

SB21

調査区の南寄りの中央部で検出された。SB13と切り合った3(4)×3(4)間の方形に近いプランである。南西隅がSB14と重なる。

柱穴出土遺物

30~33は土師皿である。口径は6.6~7.0cmを測る。体部の立ち上がりは各々に異なる。30の外底部には板目が残る。34は土師壺である。復元口径10.4cmを測る。35は陶器壺である。外面体部上半部にカキメが施され、内面は頸部に螺旋状のナデ痕、体部には絞った縦皺状の痕が残る。外面の頸部から胴部上位まで緑灰色の施釉がみられるが、下半部は剥落、劣化が著しく不明瞭である。内面体部に

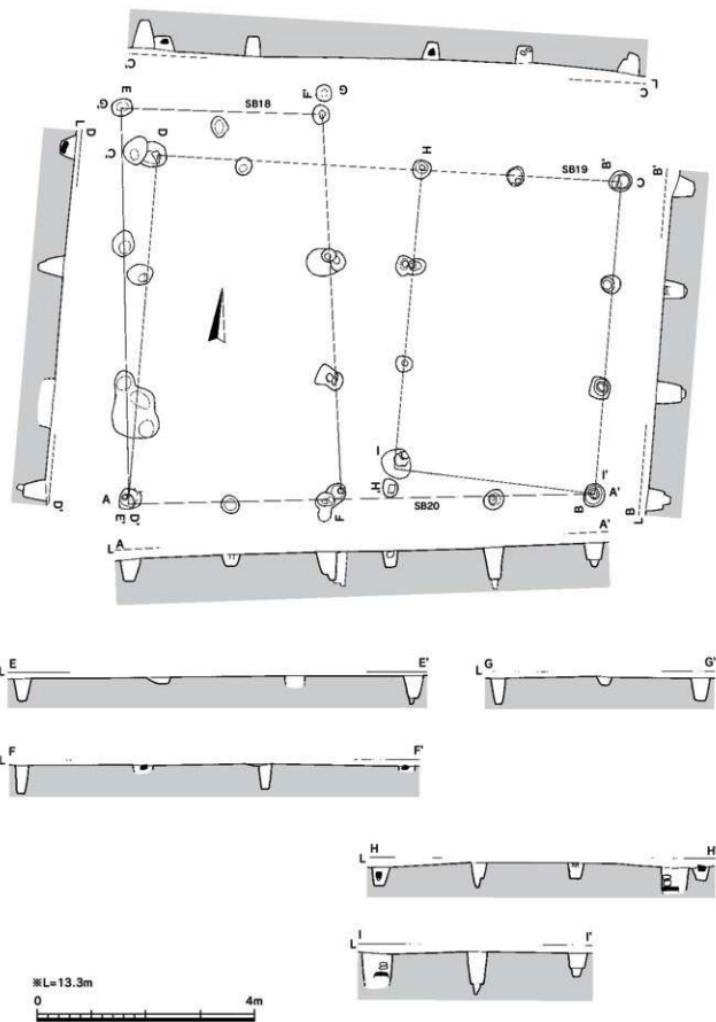


第26図 SB14~17実測図 (1/80)

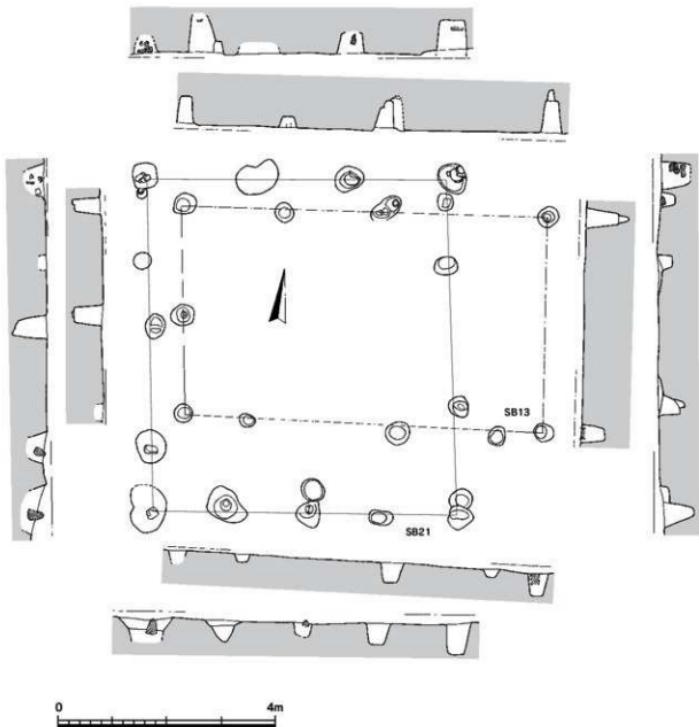
も薄く釉が残る。

石製品 S5, S6は板牌である。砂岩製で、いずれも火熱を受け、赤変している。S5は条線が2条彫り込まれている。S6は梵字がみられる。S7は白片である。花崗岩製か。

その他 図示していないが、多くの柱穴からは壁体とみられる焼けた粘土塊が出土した。



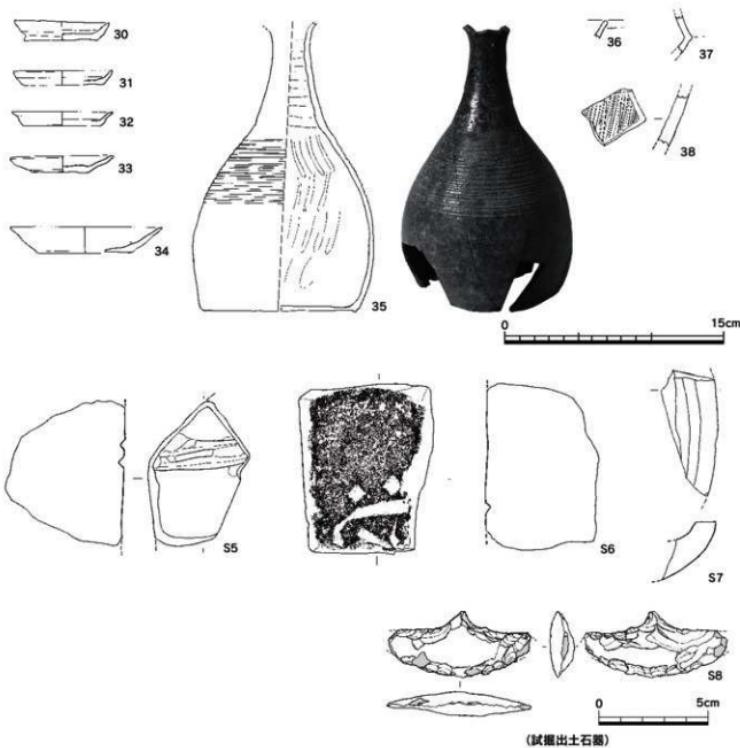
第27図 SB18~20実測図 (1/80)



第28図 SB21実測図 (1/80)

試掘出土石器（第29図）

第20図 S8は調査前の試掘で出土した安山岩製の石匙である。縄文まで遡る時期で本地点の出土遺物で最も古い。



第29図 中世柱穴出土遺物実測図 (1/3)

V まとめ

1. 弥生前期の環濠集落について

(1) 環濠の規模と形状

これまでに有田遺跡群では2区画の環濠が検出されている。その位置は台地の最高所である南側に並列している。検出された遺構を昭和初期の地形図に写した図が第33図である。なお、西側の環濠内最高所からの尾根筋に位置したB地点の189次、239次において検出された溝は断面台形状を呈し、時期も中期初頭までのものを含み異なる。

(2) 検出された貯蔵穴

本調査地点は環濠の中央付近に位置する。削平が著しく、深さ1m以上が失われていると思われる。完掘していないので、時期や形状は不明確であるが、一部の出土遺物は板付I式期である。

第1表 中世の復元掘立柱建物一覧

遺構名	棟方向	柱間数	梁行1	梁行2	桁行1	桁行2	備考
SB01	南北	2×	428				庇有
SB02	南北	2×4	456	470	770	764 (870)	SB02~04は建て替え
SB03	南北	2×4	500	482	770	806	
SB04	南北	2×4	530	538	770	740	
SB05	南北	2×4	584	584	766	766	
SB06	南北	3×3	522	514	676	682	間仕切り有
SB07	南北	2×3	366	378	566	556	
SB08	南北	3×4	564	572	730	750	間仕切り有
SB09	東西	2×2 (2×3)	372	374	556	566	SB10と一体の場合は桁行4間 (724cm)
SB10	東西	2×3	364	352	538	552	
SB11	南北	2×	406				
SB12	東西	2×3	496	530	884	854	
SB13	東西	2×3	384	394	670	658	
SB14	南北	3×4	572	590	720	746	
SB15	東西	3×3	526	570	664	680	
SB16	東西	3×3	464	540	664	690	
SB17	南北	4×4	728	664	676	744	ほぼ方形プラン
SB18	南北	2×3	374	370 (386)	722	690~730	
SB19	南北	2×3	366	366 (374)	542 (590)	572	
SB20	東西	3×4	630	572	864	854 (900)	
SB21	南北	3 (4) ×3 (4)	570	560	610	620	ほぼ方形プラン

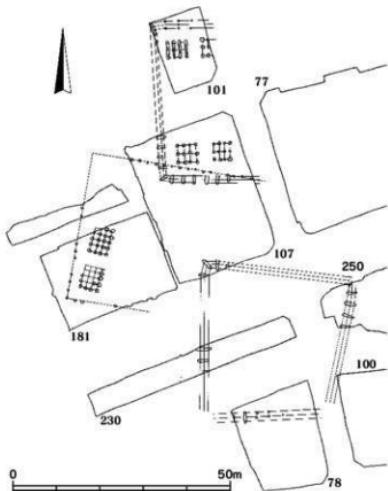
凡例 南北棟 梁行1は北辺、梁行2は南辺、桁行1は西辺、桁行2は東辺

東西棟 梁行1は西辺、梁行2は東辺、桁行1は北辺、桁行2は南辺を示す。

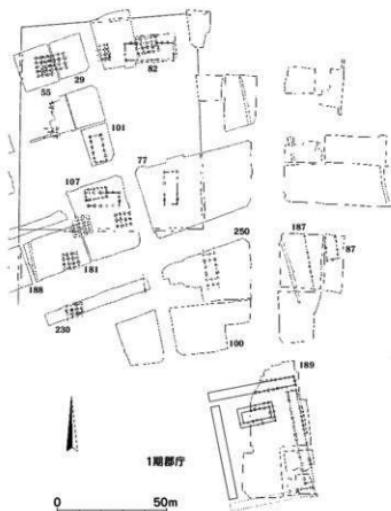
2. 「那津官家」関連施設について

(1) 区画の規模と特徴

Ⅲ-2で記したように有田遺跡群、比恵遺跡群で検出されている3本柱列の櫛(塀)に囲まれた倉庫群は「那津官家」の関連施設と考えられている。本調査においても3本柱列が検出され、櫛(塀)によって囲まれた1区画の規模が明らかになった。市報663集「比恵29」にまとめられている既往の報告の呼称を引き継ぎこの区画を⑥-B群とする。切り合っている以前の1本柱による区画を⑥-A群とする。今回明確になった⑥-B群の南側区画の規模は3本柱の中央柱を基準として北辺33m、南辺28m、西辺35m、東辺31mとなる。その特徴として以下が挙げられる。1. 周辺で検出された施設同様に、南北辺長が34m前後で規画的である。2. 地形の制約により隅角は直ではなく歪な方形となる。3. 同様の施設が併設されている。4. 布堀りの規模、柱間は有田遺跡群で検出された他の施設と近似した数値である。5. 隅角の布堀りのみ斜行する。



第30図 「那津官家」関連の区画施設 (1/1,000)



第31図 郡衙施設分布図 (1/2,000)

特に、区画の規模、布掘りの規模、内部の柱建物（倉）の規模からみると比恵遺跡群8・72次、109・125次において検出されたものより小さく、また、比恵遺跡群7・13次において中心的な管理施設が検出されたこと、比恵遺跡群125次のSB2005のように棟持柱を有した特異な構造の象徴的な建物が検出されていることからも、中枢機能は比恵遺跡群に置かれているものと考えられる。なお、このように構成や用途に応じて施設内の倉庫群の規模も異なることから他の官衙施設や豪族居館の一部の倉庫規模を単に比較するだけでは概略の把握にとどまり特徴を十分反映できない。

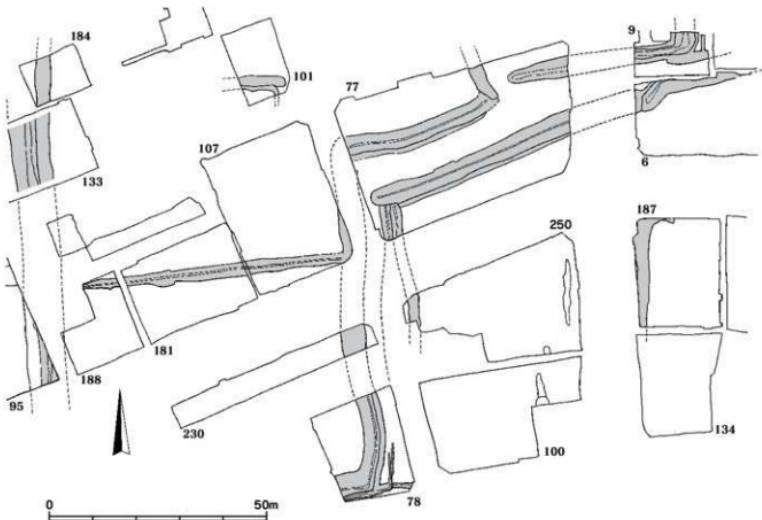
(2) 3本柱列について

これまでの調査成果で外郭施設は1本柱の欄から3本柱列に、3本柱列は隅角の布掘りの方向が、隅角のみ斜行するものから、隅角に近くなるに従い、放射状に斜行するものへと移行していくと考えらえている。しかし、3本柱列の構造については明らかになっていない。これまでの検出例から以下の特徴がみられる。1. 3本柱の中央の柱穴が最も深い例が多い。2. 隅角への柱筋は中央の柱穴が良く通る。3. 比恵遺跡群7・13次調査例のようにコの字形に長舎を挟んだ事例から、壁構造の施設の可能性が高い。従って、中央柱の両側に控え柱を据えた構造に近い構造が推測される。これまでの調査の積み重ねによって自ずと、その配置や規模等は明らかになってきた。しかし、個々の遺構、施設の詳細な比較検討は十分とはいえない、今後を進めていきたい。

3. 7~8世紀の官衙遺構について

(1) 時期と配置

これまでの有田遺跡群の調査によって



第32図 中世末環濠分布図 (1/1,000)

早良郡衙の郡庁と正倉城が判明してきた。さらに、その倉庫群の形状と方位からおよそ以下の3時期に分類することができる。

第1期 時期は7世紀後半～8世紀前半頃か。第189次等で検出された郡庁と北西側の総柱倉庫群が比定できる。その主軸方位はN-11°-W前後である。

第2期 時期は8世紀中頃～後半頃か。本調査の側柱建物も含まれると考えられる。また近接したSK02との関連は不明であるが、この時期に含まれる可能性がある。北西側の第101、107次調査で検出された側柱建物や東側の第87次調査で検出された側柱建物が比定できると思われる。主軸方位はN-8°-W前後である。

第3期 時期は8世紀中頃以降か。北西側の溝で方形で囲まれ、第82、77、107次調査の側柱建物がこの時期に比定できるとみられる。主軸方位は真北に近い。

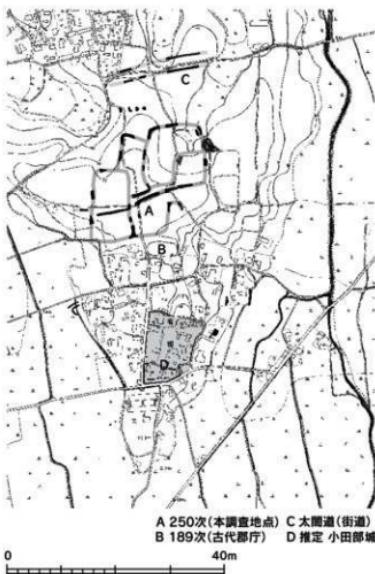
(2) 建物の性格

上記の3時期に対して、郡庁が判明しているのは既述した第1期のみである。郡庁が検出された第189次の位置は第33図(B地点)でみられるように本調査区との間に深い谷を挟み、方形に高くなった地形が読み取れる。現在、本調査区の北東部から交差点にかけての位置が台地の最高所となり、第1期郡庁の検出面は約15cm下がっている。当時の比高差は明らかではないが、本調査地点は、第34図で示した推定官道から郡庁に向かって延びた道路の最高所付近になっていたことは明らかである。従って、本調査区周辺に何らかの象徴的な施設が置かれていたことは十分推測される。

本調査で検出されたSB1006・1007・1008は側柱建物が複列し、その連結した桁行は30.8m以上になるとみられる。このような構造の施設は今までの調査ではみられず、第189次の郡庁長舎をのぞき桁行規模は最大である。その性格は並び倉もしくは長舎の一部が考えられる。後者の場合、第2期の郡庁の可能性がある。



第33図 弥生前期環濠位置図 (1/8,000)



第34図 中世末期環濠位置図 (1/8,000)

未だ推測の域をでないが、上述の第3期にみられた方形区画が当該期の郡庁と想定すれば、北側へ漸次移動したことになる。

なお、第1期郡庁廃絶後の官衙施設の遺構は無く、また、本調査区においてもSB1006・1007・1008の第2期以外の時期の遺構（施設）は検出されていない。遺構の遺存状況から、削平され、完全に消滅したとは考えにくく、最高所にもかかわらず廃絶後に施設を設置しない事由があったものと思われる。

4. 中世末の屋敷跡について

(1) 連郭式の屋敷地

丘陵の中央を横断する推定の古代官道と重なり、太閼道と呼ばれる街道より以南に16世紀の連郭式の濠が検出されてきた¹¹⁾。その形状は濠に囲まれた大小の曲輪が連結し、その規模や形状も一定ではなく、複雑である。本調査区は北辺の濠が斜行して歪な方形であるが、南北32m以上、東西約25mの曲輪内に位置している。

(2) 挖立柱建物の規模と配置

検出された中世掘立柱建物の柱穴は北西部で検出された中世末の濠SD496付近では少なくなっている。調査区東際、南際では南北棟、中央部では東西棟が多くみられる。その中でも、北寄りの中央部で検出された4面庇のSB12は最大規模で、曲輪内においても中央部を占めていることから、中心的な主屋とみられる。

他の掘立柱建物は梁間2間、桁行3間、ないし4間が大半を占め、梁間3間以上のものは方形のプランが多い。また、各掘立柱建物は切り合いから3回以上の建て替えがみられるものがほとんどである。柱穴からは焼土、焼けた壁体、火熱を受けた根石等が多く出土し、戦火を被ったとみられる。

(3) 時期と史料から

柱穴の大半は出土遺物から16世紀代とみられる。近世初期への継続はみられない。

有田・小田部に関する史料からみると庄崎氏が嘉吉元年（1441）に小田部地頭職を少弐教頼から安堵されている。その後の天文十年（1541）頃といわれる飯盛宮行事屋敷小田部村地頭名注文案（牛尾文書）からも庄崎氏が有田に給地されていたことが推察される。しかし、天文二十（1551）年の大内氏滅亡後、小田部氏が大友氏の配下で安楽平城督（早良郡代）として勢力を伸ばし所領を収奪、拡大していくなかで庄崎氏は小田部氏の同陣衆となり被官化していく。天文二十二年（1553）に安楽平城督となつた小田部鎮元は天正七年（1579）、龍造寺氏から攻められ、討ち死にし。小田部氏の早良郡支配が終わる。この戦いで恩賞地として庄崎氏に有田をはじめとする土地が与えられるが、その恩賞地から小田部氏が当時、早良郡のほぼ全城を支配していたことがわかる³²⁾。

小田部城は天文年間の鎮元の以前と考えられる時期に「太宰官内志」によると肥前平戸の松浦鎮隆が小田部城主木下筑前守を討ち、居城としたとする。「筑前国続風土記拾遺」で「築城」、「堀内」とも呼ばれる「小田部城」は第34図に示すように連続する曲輪の南側に位置するとみられる。周辺を含め調査が進んでいないので、構造や時期は不明であるが小田部氏支配以後の17世紀の近世までの遺物を含む濠が検出されている。

小田部城から直線にして5.5km離れた山城の安楽平城に対して、早良平野を一望できる低丘陵に立地した小田部城は「里城」、「出城」の性格を有し、位置的にも大友氏の筑前国支配のなかで志摩と博多を結ぶ要所であり³³⁾、早良平野を支配するうえでも中心的な場所である。検出された連郭式の屋敷地は戦国期の防御的な色彩が濃く、城砦的な機能をもつた庄崎氏を主とする家臣団の屋敷地とみられる。しかし、未調査の部分は多く、比定されている小田部城を小田部氏の屋形とする

是非も含め、屋敷地の形状や範囲など不明な部分も多い。

註

1) 山崎龍男 1996 「福岡市早良区有田遺跡における戦国期曲輪状遺構の検討」『国分直一博士米寿記念論文集 ヒト・モノ・コトバの』慶友社

2) 古良国光 1991 「小田部氏関係史料」『福岡市博物館研究紀要 初刊号』 福岡市博物館

3) 芥川龍男 1984 「戦国末期における筑前小田部氏について」『駿沢史学 32号』駿沢史学会

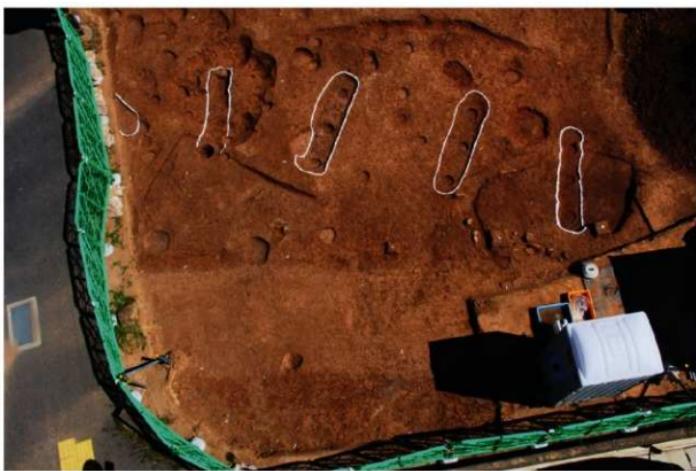
写真図版



ph.1 調査区東半（西から）



ph.2 調査区中央～西側（東から 中央の掘立柱建物はSB1006・1007・1008）



ph.3 調査区西際（西から 白線はSA1005。 带状に明色になった部分は中世末期の濠SD496）

報 告 書 抄 錄

有田・小田部 5 6

—有田遺跡群第250次調査の報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1250集

2015(平成27)年3月25日発行

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
☎(092)711-4667

印 刷 有限会社宏栄社印刷
福岡市南区清水1-10-5
☎(092)552-4967
